

ジンポー語のヴォイスとその周辺現象に関する資料 Materials on Voice and Related Phenomena in Jinghpaw

倉部 慶太
Keita Kurabe

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

要旨：ジンポー語は、シナ・チベット語族チベット・ビルマ語派に属し、北ビルマを中心に、東は中国雲南省、西は北東インドにまで分布している。本稿では、高垣他（2012）がヴォイスおよびその周辺現象の調査を目的として作成した翻訳型調査票を参照しながら、各調査文に対応するジンポー語データを提示することを目的とする。ジンポー語には、広義のヴォイスに関する現象として、受動、使役、適用、相互、自他交替などが認められる。ただし、調査票の各項目に対応する文が、ジンポー語では必ずしもヴォイス交替に関与しない場合がある。また、ジンポー語ではヴォイスに関わるものの、調査票に含まれていない適応態などの形式は本稿の対象外である。

Abstract: Jinghpaw is a member of the Tibeto-Burman branch of the Sino-Tibetan language family. It is spoken primarily in northern Burma (Myanmar) and extends eastward into Yunnan Province in China and westward into northeastern India. This paper presents Jinghpaw data corresponding to items from the translation-based questionnaire developed by Takagaki et al. (2012), which was designed to explore voice and related grammatical phenomena. In Jinghpaw, several constructions can be regarded as instances of voice in a broad sense, including passive, causative, applicative, reciprocal, and transitive–intransitive alternation. However, the Jinghpaw data corresponding to the questionnaire items do not necessarily involve voice alternation in the language. Furthermore, constructions such as the applicative, which are relevant to voice in Jinghpaw but are not included in the questionnaire, fall outside the scope of this study.

DOI: <https://doi.org/10.15026/0002001473>

キーワード：ジンポー語、シナ・チベット語族、ヴォイス、使役、自他交替

Keywords: Jinghpaw, Sino-Tibetan, voice, causative, transitive–intransitive alternation

1. はじめに

ジンポー語 (ISO 639-3: kac) は、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) に属する言語である。北ビルマ (ミャンマー) を中心に分布するが、一部の話者は隣接する中国雲南省および北東インドにも居住している。この言語は、北ビルマを中心に居住するカチン人 (Kachin) の共通語 (lingua franca) の一つとしても用いられており、言語的に必ずしも一様ではないカチンの人々を結びつける役割を果たしている (Kurabe 2021)。ジンポー語は、音節声調言語であり、4種類の対立的な声調を持つ。形態的には主として分析的であり、統語的には動詞が節末に置かれる語順を持つ。節および名詞句の両レベルで従属部標示を行い、主格・対格型のアラインメントを示す。名詞句は、文脈から明らかな場合には省略されることが多い。周辺言語や同系言語に広く見られるように、動詞連続や節の名詞化を多用する言語である。名詞化された節は、動詞補



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

文、名詞補文、関係節（主要部内在型と主要部欠如型を含む）、副詞節などの機能領域をカバーする（Kurabe 2016）。

本稿では、『東京外国語大学語学研究所論集』17号付録に収録された高垣他（2012）の調査票を参照し、ヴォイスに関するジンポー語の資料を提示する。この翻訳型調査票には、ヴォイスおよびその周辺現象の調査を目的とした日本語の例文が収められている。ヴォイスを「節における意味役割と文法関係とのあいだの関係を調整する操作」（Payne 1997: 169, 筆者訳）と広義に捉えるならば、能動・受動・中動をはじめとして、動詞の自他、使役、授受などの表現もヴォイスの射程に入ってくる。本調査票は、このような広義のヴォイスの調査を意図したものである。ただし、ジンポー語で意味的に対応する文が必ずしもヴォイスに関与しない場合がある点に留意されたい。また、ジンポー語ではヴォイスに関わるものの、調査票に含まれていない形式は本稿の対象外である。

本稿で提示する資料は、高垣他（2012）のヴォイス調査票を用いて2025年9月に実施したエリシテーション調査によって得られたものである。調査協力者は、ビルマのカチン州ミッチーナ市（Myitkyina）出身のL氏で、1989年生まれ的女性話者である。L氏は言語形成期を含め長期間を同市で過ごしたが、2014年より日本の東京に滞在している。ジンポー語とビルマ語のバイリンガルであると同時に、高度な日本語運用能力も備えている。当該調査票には英語やビルマ語の対訳も存在するが、本稿でのエリシテーション調査は、日本語文を直接ジンポー語へ翻訳する形で実施した。その理由の一つは、日本語の調査項目がヴォイス関連形式であっても、対応する英語文やビルマ語文が必ずしも同様の形式を反映していない場合があるためである。さらに、ビルマ語はビルマにおける公用語であることから、調査文にビルマ語を用いた場合、言語的影響がより顕著に生じる可能性が高い。この点も、日本語の調査項目を選択した理由の一つである。

2. ヴォイス関連資料

本節では、高垣他（2012）の調査票に収録された調査文に対応するジンポー語のデータを提示する¹。次の例文（1a）と（1b）は、自動詞と他動詞の対立を意図した調査項目である。自他交替の表現方法には、類型論的にさまざまなタイプが認められる。たとえば、自動詞から他動詞を派生するタイプ（Causative coding）、他動詞から自動詞を派生するタイプ（Anticausative coding）、自他ともに有標（Equipollent coding）、自他ともに同形（Labile coding）、自他ともに無標・異形（Suppletive coding）などがある（Haspelmath 1993）。次の（1a）と（1b）が示すように、ジンポー語の「開く」と「開ける」は自他同形型である。これは、中国語やラオ語、クメール語などと同様であり（風間 2012: 2）、ほかの東南アジア大陸部諸語に広く見られるタイプの一つである（Enfield 2021: 121–123）。（1a）と（1b）に例示されるとおり、ジンポー語もこの種の自他同形型動詞を多く持つ。ジンポー語ではほかにも Causative coding（e.g., thèn「壊れる」vs. jə-thèn「壊す」）や Suppletive coding（e.g., si「死ぬ」vs. sət「殺す」）が広く観察される（Kurabe 2024: 37–39）。

¹ 例文番号は、基本的に調査票の番号に対応する。たとえば、（1a）および（1b）は、枝番を含めて調査票の番号を示すものである。ただし、調査文が一文であっても、ジンポー語では二文で表現可能な場合がある。そのような場合には、調査票では枝番が付されていないが、本稿では便宜上、調査文番号の括弧外に枝番を付して区別した。たとえば、調査文（1c）は一文であるが、ジンポー語では二文で表現できるため、（1c）a, b のように示している。

- (4a) (grày gəsúp=məyu=to=?ay mà=phé? ?ətík-?ənàŋ)
 very play=DESID=CONT=NMLZ child=ACC intensely-insistently
 gənù=gò gəcà=phé? mùk sa məri=çəŋún=?ay.
 mother=TOP child=ACC bread go buy=CAUS=DECL
 「(とても遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供にパンを買いに行かせた。」

- (4b) (çingàn=dè? grày sa gəsúp=məyu=to=?ay=phé? yu=ná)
 outside=ALL very go play=DESID=CONT=NMLZ=ACC see=SEQ
 gənù=gò gəcà=phé? sa gəsúp=çəŋún=?ay.
 mother=TOP child=ACC go play=CAUS=DECL
 「(とても遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた。」

例文 (5a) と (5b) は、使役における行為の直接性の調査を意図した項目である。言語によっては、他動詞表現が直接的行為、使役表現が命令などの間接的行為を示すなど、両者の機能が異なる場合がある (風間 2012: 4)。ジンポー語では、この区別は 2 種類の使役形によって表現可能である。すなわち、接頭辞による形態的使役は使役者が被使役者に直接働きかける直接使役を、助動詞による統語的使役は間接的に働きかける間接使役を表す (Maran & Clifton 1976; 徐 1984; Kurabe 2016: 276–277)。次の (5a) は話者が弟に対して直接的に (たとえば幼い弟に実際に手を貸して) 服を着せる場合を表す。これに対し、(5b) では話者が弟に間接的に (たとえば「服を着なさい」と口頭で指示することで) 服を着せる場合を表している。

- (5a) ŋay gənaw=phé? pəloŋ jə-phún=?ay.
 1sg yBr=ACC clothes CAUS-wear=DECL
 「私は弟に服を着せた。」

- (5b) ŋay gənaw=phé? pəloŋ phún=çəŋún=?ay.
 1sg yBr=ACC clothes wear=CAUS=DECL
 「私は弟に服を着させた。」

なお、(5a) のような直接使役は、受益形を用いて以下のように表現することも可能である。一方、この文は間接使役に用いることはできない。ビルマ語でも同様に、受益形で直接使役を表すことができる (岡野 2012: 173)。

- (5a) ŋay gənaw=phé? pəloŋ phún=ya=?ay.
 1sg yBr=ACC clothes wear=BEN=DECL
 「私は弟に服を着せた。」 (直訳「私は弟に服を着せてやった。」)

例文 (6) と (7) は、やりもらいに関する表現を意図した調査項目である。まず、(6) は (7) のやりもらい表現との関連を見るための授受動詞文の例である。ジンポー語授受動詞文の典型的な格枠組みでは、動作主 (A) と対象 (T) は格標示を受けず、受益者 (R) は対格で標示される。これはほかの三項他動詞文における典型的な格枠組みと同様である (Kurabe 2016: 197–199)。

- (6) $\eta\text{ay } g\text{ə}naw=ph\acute{e}?\text{ day } l\grave{a}y\text{ka-b}\grave{u}k \text{ j}\grave{o}=?\text{ay.}$
 1sg yBr=ACC that letter-book give=DECL

「私は弟にその本をあげた。」

例文 (7a) と (7b) は, 日本語のような「やる」(授恩恵)と「くれる」(受恩恵)の区別の調査を意図した項目である。風間 (2012) で検討されている 14 言語ではこの区別を持つ言語は皆無であり, この区別を持つ日本語の場合でも, 近年の日本語に発達した特徴的な区別であるとされる (風間 2012: 4)。次の例が示すとおり, ジンポー語でも授恩恵と受恩恵は形式的に区別されない。双方とも受益の助動詞 =ya を用いて表現される。なお, この助動詞は, 動詞 ya を通時的な起源とする形式である。この動詞は本来「与える」を意味していたと考えられるが, 現代語ではもっぱら「嫁にやる」の意味で用いられる。これは (6) のような動詞 jò? 「与える」が発展したためであると考えられる。このような授受動詞の受益形への文法化は, 東アジアの言語に広く認められるものである (ibid., p.5)。

- (7a) $\eta\text{ay } g\text{ə}naw=ph\acute{e}?\text{ l}\grave{a}y\text{ka-b}\grave{u}k \text{ th}\acute{i}=ya=?\text{ay.}$
 1sg yBr=ACC letter-book read=BEN=DECL

「私は弟に本を読んであげた。」(直訳「私は弟に本を読んでやった。」)

- (7b) $g\text{ə}ph\grave{u} \eta\text{ay}=ph\acute{e}?\text{ l}\grave{a}y\text{ka-b}\grave{u}k \text{ th}\acute{i}=ya=?\text{ay.}$
 eBr 1sg=ACC letter-book read=BEN=DECL

「兄は私に本を読んでくれた。」(直訳「兄は私に本を読んでやった。」)

例文 (7c) は, 通言語的に珍しいとされる, 日本語の補助動詞「もらう」に相当する受益表現を意図した調査項目である。通言語的には, 使役形を用いる言語や, 主語を入れ替えた受益形を用いる言語などがある (風間 2012: 5)。ジンポー語でも, 以下の (7c) のように, 後者の手段によって同様の意味が表現される。

- (7c) $?\text{ə}n\acute{u} \eta\text{ay}=ph\acute{e}?\text{ k}\acute{ə}r\acute{a} \text{ z}\grave{e}n=ya=?\text{ay.}$
 mother 1sg=ACC hair clip=BEN=DECL

「私は母に髪を切ってもらった。」(直訳「母は私に髪を切ってやった。」)

例文 (8) は再帰を意図した調査項目である。再帰表現は, 類型論的に, 動詞側に標示が現れる主要部標示型の言語, 名詞側に標示が現れる従属部標示型の言語, 両方に標示が現れる二重標示型の言語, いずれにも標示がない無標示型の言語が見出される (風間 2012: 5–6)。例文 (8a) は 1 人称かつ自身の全体が対象の例, (8b) は 1 人称かつ自身の部分が対象の例, (8c) は 3 人称かつ自身の部分が対象の例である。言語によっては身体全体の場合のみ再帰形を用いる言語や, 主語の人称によって再帰形を使い分ける言語がある (ibid., pp.5–6)。一方, ジンポー語は無標示型の言語であり, 次の 3 つの例が示すとおり, 再帰はヴォイスに関与しないと考えられる。

- (8a) $\eta\text{ay } kh\grave{u}m \text{ g}\acute{ə}c\grave{i}n=?\text{ay.}$
 1sg body wash=DECL

「私は (自分の) 体を洗った。」

(8b) $\eta ay \text{ l} \acute{o} t \acute{a} ? g \acute{e} \acute{c} i n = ? ay .$
 1sg hand wash=DECL
 「私は手を洗った。」

(8c) $c i \text{ l} \acute{o} t \acute{a} ? g \acute{e} \acute{c} i n = ? ay .$
 3sg hand wash=DECL
 「彼は手を洗った。」

例文 (9) は「自分の利益のために行為を行う場合に特有の表現が存在するか」を検証するための調査項目である。動詞に何らかの標示が現れる場合、その形式は自利態とみなすことができる。言語によっては再帰表現や授受表現と関連する形式が用いられることが指摘されている (風間 2012: 6)。一方、ジンポー語では、次の例に示すとおり、自利態は認められない。

(9) $(\eta ay = n \acute{a} \text{ m} \acute{o} t u) \eta ay \text{ d} a y \text{ l} \acute{a} y k a - b \acute{u} k \text{ m} \acute{a} r i = ? ay .$
 1sg=GEN sake 1sg that letter-book buy=DECL
 「(自分のために) 私はその本を買った。」

例文 (10) は、相互態の有無を確認するための調査項目である。動詞に何らかの標示があれば、それは相互態あるいは相互的な動詞形と解釈される。言語によっては、再帰や複数標識、副詞句などによって相互の意味が表されうる (風間 2012: 6-7)。ジンポー語では、助動詞 =khát を用いて相互態が形成される。これは語彙的動詞 khát 「争う」を通時的起源に持つ助動詞である。この助動詞に加えて、任意の副詞句 $\text{c} \acute{e} d \acute{a} ? - d \acute{a} ?$ 「互いに」を用いて相互の意味を表すことも可能である。

(10) $\text{c} \acute{a} n t h e = g \acute{o} (\text{c} \acute{e} d \acute{a} ? - d \acute{a} ?) \text{ t h u y} = k h \acute{a} t = ? ay .$
 3pl=TOP each-RED beat=RECP=DECL
 「彼らは (互いに) 殴り合っていた。」

例文 (11) は、衆動を表す形式を調査するための調査項目である。衆動について特別な動詞形を持つ言語は少なく、多くの言語では副詞的な表現によって衆動を表す。モンゴル語では明確な衆動態が認められ、キルギス語では相互の接辞が衆動にも用いられる (風間 2012: 7)。ジンポー語では、これに準ずる動詞の形式として、動作主の複数性を示す助動詞を用いる。

(11) $\text{d} a y \text{ m} \acute{e} \text{c} \acute{a} = n i = g \acute{o} (\text{y} \acute{o} \eta = \text{t h} \acute{e} ? \text{ r} \acute{a} w) \text{ m} \acute{a} r e = d \acute{e} ? \text{ s} a = m \acute{a} ? = ? ay .$
 that person=PL=TOP all=COM together city=ALL go=PL=DECL
 「その人たちは (みんな一緒に) 街へ行った。」

例文 (12) は、自発を意図した調査項目である。日本語のように「可能」あるいはそれに類する表現によって自発を表す言語として、トルコ語やラトヴィア語などがある。印欧語の中には、再帰の動詞形式によって自発を表現できる言語もある (風間 2012: 7-8)。ビルマ語では、主語の制御性を制限する「不可避」の助動詞によって自発を表す (岡野 2012: 177)。ジンポー語でも、(12a) のように、「義務」や「不可避」を表す動詞 $\text{r} \acute{a}$ 「必要だ」によって自発を表すことが可能である。なお、この形式は否定辞の直接付加が可能であるなど、助動詞にはない動詞の振る舞いを示すため、ジンポー語では動詞であると考えられる。また、次の (12b) のように、自発は「願望」や「変化の直前」を表す助動詞 $\text{m} \acute{a} y u$ によって表現することも可能である。

(12) a. *day sùmla-khruŋ khràp rà=?ay.*

that picture-alive cry need=DECL

「その映画は泣ける。」(直訳「その映画は泣かねばならない。」)

b. *day sùmla-khruŋ yu=yàŋ khràp=məyu=wà=?ay.*

that picture-alive see=when cry=DESID=VEN=DECL

「その映画を見ると泣いてしまう。」(直訳「その映画を見ると泣きたくなる。」)

例文 (13a) と (13b) は、意志・無意志の対立を意図した調査項目である。印欧語や北東アジアの言語はこの区別にあまり関心を示さないのに対し、東南アジアの言語はこの対立に敏感である。マレー語には、明確な偶発・自発の形式がある。ラオ語やクメール語では、(13a) には他動詞「割る」が、(13b) には自動詞「割れる」の使役などが現れるなど、この対立に自他の区別が関与することがある(風間 2012: 8)。ジンポー語でも、ビルマ語と同様に(岡野 2012: 178)、他動詞の表す行為は原則として意志的である(13a)。意志動詞を無意志動詞に変換するには、無意志化の助動詞 =*khrùp* を用いる(13b)。この助動詞は、語彙的動詞 *khrùp* 「偶然出会う」をその通時的起源に持つ。

(13a) *ŋay ?ù-dì=phé? gà=?ay.*

1sg bird-egg=ACC break=DECL

「私は卵を割った。」

(13b) *ŋay gom=phé? gà=?khrùp=?ay.*

1sg cup=ACC break=accidentally=DECL

「(うっかり落として) 私はコップを割った／割ってしまった。」

例文 (14a) と (14b) は、不随意の不可能と随意の不可能の区別を意図した調査項目である。中国語、ラオ語、クメール語などでは、動詞連続によって両者を区別することが可能である(風間 2012: 8)。一方、ジンポー語では、ビルマ語やマレー語と同様に、同一形式によって両者を表現することができる。なお、ジンポー語には可能を表す形式が複数あり、(14) のような動詞 *lù* 「得る」は状況可能を、動詞 *ce* 「知る」は能力可能を、動詞 *dàŋ* 「勝つ」は困難を乗り越えた可能を表す。これらの形式は、否定辞を直接付加できるため、助動詞ではなく動詞である。

(14a) *məní ŋay coffee lù? lày=ná n-lù ?yúp=?ay.*

yesterday 1sg coffee drink exceed=SEQ NEG-get sleep=DECL

「きのう私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので)眠れなかった。」

(14b) *məní ŋay bùŋli ló?=ná n-lù ?yúp=?ay.*

yesterday 1sg work be.many=SEQ NEG-get sleep=DECL

「きのう私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので)眠れなかった。」

例文 (15) と (16) は、全体と部分・主体を意図した調査項目である。(15) が一時的であるのに対し、(16) は恒常的である。(15) については、スペイン語やリトアニア語では、感覚主体を与格に取る与格構文が用いられる。トルコ語やモンゴル語では「私の頭が痛い」のように所有構造における「頭」を主語とする。一方、日本語、朝鮮語、中国語、クメール語などでは、一種の二重主語文が可能

である（風間 2012: 9）。ジンポー語でも、(15a) のように、二重主語型の構文を用いることが可能である。また、(15b) のように、所有構造における「頭」を主語として表現することもできる。

- (15) a. $\eta ay=gò \text{ bo } m\acute{a}c\acute{i}=?ay.$
 1sg=TOP head be.sick=DECL
 「私は頭が痛い。」
- b. $\eta ay=n\acute{a} \text{ bo } m\acute{a}c\acute{i}=?ay.$
 1sg=GEN head be.sick=DECL
 「私は頭が痛い。」（直訳「私の頭が痛い。」）

例文 (16) は、全体と部分・主体・恒常的を意図した調査項目である。(15) と同様に、「髪」を主語とする言語や二重主語型の構文を取る言語がある。スペイン語やリトアニア語では動詞「持つ」を用いて表現する。ラオ語やロシア語では「彼女には長い髪がある」のような存在文を用いる。日本語や朝鮮語では「長い髪をしている」と表現することもできる（風間 2012: 9–10）。ジンポー語では、二重主語型の表現 (16a)、所有構造における「髪」を主語とする表現 (16b)、「持つ、得る」を用いる表現 (16c) などが可能である。

- (16) a. $\epsilon i=gò \text{ k}\acute{e}r\acute{a} \text{ g}\acute{e}l\grave{u}=?ay.$
 3sg=TOP hair be.long=DECL
 「彼女は髪が長い。」
- b. $\epsilon i=n\acute{a} \text{ k}\acute{e}r\acute{a} \text{ g}\acute{e}l\grave{u}=?ay.$
 3sg=GEN hair be.long=DECL
 「彼女は髪が長い。」（直訳「彼女の髪が長い。」）
- c. $\epsilon i \text{ k}\acute{e}r\acute{a} \text{ g}\acute{e}l\grave{u} \text{ l}\grave{u}=?ay.$
 3sg hair long get=DECL
 「彼女は髪が長い。」（直訳「彼女は長い髪を持つ。」）

例文 (17a) と (17b) は、全体と部分・対象を意図した調査項目である。前者は接触、後者は結果状態が継続的である。他者の身体部位への働きかけに関わる表現には、「彼の肩を叩いた」のような所有構造で表す一括支配型と、「彼を肩において叩いた」のような人物全体を目的語として身体部位を切り離す分割支配型があり、前者が優勢である（風間 2012: 10）。ジンポー語でも、以下の例のように、一括支配型を取る。

- (17a) $\epsilon i \text{ l}\acute{e}g\grave{a} \text{ m}\acute{e}\check{c}\grave{a}=n\acute{a} \text{ l}\acute{e}p\check{h}\acute{a}=?p\acute{h}\acute{e}? \text{ g}\acute{e}y\grave{e}t=?ay.$
 3sg other person=GEN shoulder=ACC hit=DECL
 「彼は（別の）彼の肩をたたいた。」
- (17b) $\epsilon i \text{ l}\acute{e}g\grave{a} \text{ m}\acute{e}\check{c}\grave{a}=n\acute{a} \text{ l}\acute{e}p\check{h}\grave{u}m=?p\acute{h}\acute{e}? \text{ j}\acute{u}m=?ay.$
 3sg other person=GEN arm=ACC hold=DECL
 「彼は（別の）彼の腕をつかんだ。」

例文 (18a) は, 知覚構文を意図した調査項目であり, (18b) はそれとの比較として用意された項目である. 知覚表現には, 知覚内容を別の節として述べる複文的表現と, 単文構造に近い独自の構文を用いる単文的表現がある. たとえば, スペイン語やウルドゥー語では, (18a) では動作主が対格を取るなど, (18b) とは異なる構文を示す. 多くの言語では, 知覚構文も複文的表現を取る (風間 2012: 10–11). ジンポー語でも, (18a) は (18b) と同様に, 節の名詞化による補文節を用いた複文的表現を用いる. なお, 以下の例に見られるとおり, 両者では異なる名詞化標識を用いるが, これは例文 (18b) の補文節が未実現であるのに対し, (18a) では実現しているためであり, 知覚構文か否かは無関係である.

(18a) ɲay [ci sa=wà=?ay]=phé? mù=?ay.

1sg 3sg go=VEN=NMLZ=ACC see=DECL

「私は彼がやって来るのを見た。」

(18b) ɲay [dày-ní ci sa=wà=na]=phé? ce=?ay.

1sg this-day 3sg go=VEN=IRR.NMLZ=ACC know=DECL

「私は彼が今日来ることを知っている。」

例文 (19) は, 引用文中の再帰を意図した調査項目である. 再帰代名詞を主格で用いる言語, 対格で用いる言語, 三人称代名詞を用いる言語, いずれの代名詞も用いない言語, 一人称代名詞を直接話法で用いる言語などがある (風間 2012: 11). ジンポー語では, 再帰代名詞 (19a) や三人称代名詞 (19b) を主格で用いる. また, (19c) のように, ci? khùm ci 「(直訳) 彼の体を彼が」を慣用的な再帰表現として用いることもできる. 同様の形式がビルマ語にも存在するため (岡野 2012: 180), これはビルマ語の翻訳借用である可能性がある.

(19) a. ci=gò tí?naɲ dàɲ=na=ɲú cə̀dù?=?ay.

3sg=TOP self win=IRR=QUOT think=DECL

「彼は自分 (のほう) が勝つと思った。」

b. ci=gò ci dàɲ=na=ɲú cə̀dù?=?ay.

3sg=TOP 3sg win=IRR=QUOT think=DECL

「彼は自分 (のほう) が勝つと思った。」

c. ci=gò ci? khùm ci dàɲ=na=ɲú cə̀dù?=?ay.

3sg=TOP 3sg.GEN body 3sg win=IRR=QUOT think=DECL

「彼は自分 (のほう) が勝つと思った。」

例文 (20a) と (20b) は, 部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作を比較することを目的とした調査項目である. 部分属格を用いるリトアニア語や部分を示す奪格の用法を持つトルコ語など, 部分に関心を示す言語がある一方, 文法化した要素を持たず, 副詞や語彙的・分析的表現を用いる言語も認められる (風間 2012: 11–12). ジンポー語は後者にタイプに属し, 次の例文 (20a) に示すように, 部分を表す副詞を用いる.

(20a) *ŋay (gom=ná) khàʔ=phéʔ (lòy mi) lùʔ=ʔay.*

1sg cup=GEN water=ACC a.little one drink=DECL

「私は（コップの）水（の一部）を飲んだ。」（直訳「私は（コップの）水を（少し）飲んだ。」）

(20b) *ŋay (gom=ná) khàʔ=phéʔ yòŋ lùʔ=ʔay.*

1sg cup=GEN water=ACC all drink=DECL

「私は（コップの）水を全部飲んだ。」

例文 (21) は、恒常的な否定文を意図した調査項目である。リトアニア語では否定文中の目的語が常に属格になる。ラトヴィア語では対格が用いられ、ロシア語では対格や否定属格が用いられる。トルコ語やモンゴル語には恒常性を示す動詞の屈折形式が存在する（風間 2012: 12）。一方、ジンポー語は、(21) のように、ヴォイス交替に無関心である。

(21) *ci càŋ ú-cá=ʔay.*

3sg meat NEG-eat=DECL

「彼は肉を食べない。」

例文 (22a) と (22b) は、感覚述語に関する文法を意図した調査項目である。(22a) は感覚主体を想定しないより客観的な表現を意図したものである。動詞の人称変化を持つ言語のなかには、ロシア語のように非人称動詞で表現する言語がある（風間 2012: 12）。一方、ジンポー語では、状態動詞を述語とする文を用い、ヴォイスには関与しない。

(22a) *dày-ní gətsi=ʔay.*

this-day be.cold=DECL

「今日は寒い。」

例文 (22b) は感覚主体を想定した感覚述語に関する調査項目である。感覚主体を主格で表す言語には、中国語、朝鮮語、マレーシア語、ラオ語、クメール語、ビルマ語などがある。一方、感覚主体を与格で表す言語には、ロシア語、リトアニア語、ウルドゥー語などがある。ブルガリア語では、与格主語のほかに、動詞によっては対格主語も現れる。ジンポー語は、以下の例のとおり、感覚主体を主格で表す。

(22b) *ŋay gətsi=ʔay.*

1sg be.cold=DECL

「私は（何だか）寒い（私には寒く感じる）。」

例文 (23) は、感情述語に関する調査項目である。感情述語には、感情主体が対象に働きかけるタイプ (e.g., 「怒る」) と、対象から感情主体へ働きかけるタイプ (e.g., 「怖い」) がある。例文 (23) は、後者を意図した項目である。感情主体を対格で標示するラトヴィア語のような言語がある一方、多くの言語では感情主体は主格で示される。感情を引き起こす対象は、クメール語のような具格 (e.g., 「人の多さで驚く」) や、朝鮮語のような与格 (e.g., 「人の多さに驚く」) によって標示される。一方、ラオ語のように「人が多いことに驚く」という事態を複文で表す言語や、中国語のように等位接続によって表現する言語もある（風間 2012: 13–14）。ジンポー語では、多くの言語同様、感情主体は主格で示される。また、感情を引き起こす対象は、複文 (23a) や等位接続相当の表現 (23b) で表される。

- (23) a. [məçà grày lóʔ=?ay]=phéʔ ɲay maw=màt=?ay.
 people very be.many=NMLZ=ACC 1sg be.amazed=COMPL=DECL
 「私は人がとても多いのに驚いた。」(直訳「人がとても多いことに私は驚いた。」)
- b. məçà grày lóʔ=ná ɲay maw=màt=?ay.
 people very be.many=SEQ 1sg be.amazed=COMPL=DECL
 「私は人がとても多いのに驚いた。」(直訳「人がとても多くて私は驚いた。」)

例文 (24) は、現象文・現場での直接体験を意図した調査項目である。トピック指向的な言語である中国語では、動作主が動詞の後に現れる。この文は全体が新情報であるため、主格と主題の標識の対立を持つ言語では、もっぱら前者が使用される。ジンポー語でも、以下の (24) のように、主格が用いられる。また、「雨が降る」という表現には、名詞に「雨」の意味がある型、動詞に「雨降る」の意味がある型、名詞と動詞の双方に「雨」の意味がある型の 3 種類がある (風間 2012: 14)。ジンポー語は、名詞と動詞の双方に「雨」の意味を持つ第 3 のタイプに相当する表現を用いる。

- (24) məraŋ thùʔ phaŋ=s-ay.
 rain(n) rain(v) begin=COS-DECL
 「雨が降り始めた。」

例文 (25) は、いわゆる中間構文を意図した調査項目である。自動詞化や再帰動詞化によって動詞の項を減少させる言語と、他動詞をそのまま用いる言語がある (風間 2012: 15)。ジンポー語では、(25) のように、他動詞 dùt 「売る」を用いる。ただし、làyka-bùk 「本」に対格を付加すると不自然であると判断されることから、この項は一種の主語の役割を担っていると考えられる。

- (25) nday làyka-bùk lóʔ-lóʔ lù dùt=?ay.
 this letter-book be.many-RED get sell=DECL
 「この本はよく売れる。」

調査票のもう一つの例文 (25) である「このナイフはよく切れる」も、以下の (25a) のように、同様に表現することが可能である。ほかにも自動詞 dáy 「鋭い」や lòy 「簡単だ」を用いて、(25b) や (25c) のように表現することも可能である。

- (25) a. nday òthu lù gəðòy=?ay.
 this knife get cut=DECL
 「このナイフはよく切れる。」
- b. nday òthu dáy=?ay.
 this knife be.sharp=DECL
 「このナイフはよく切れる。」(直訳「このナイフは鋭い。」)
- c. nday òthu gəðòy lòy=?ay.
 this knife cut be.easy=DECL
 「このナイフはよく切れる。」(直訳「このナイフは切るのが簡単だ。」)

略号一覧

1sg	1st person singular	COS	change of state	QUOT	quotative
3sg	3rd person singular	DECL	declarative	RECP	reciprocal
ACC	accusative	DESID	desiderative	RED	reduplication
ALL	allative	eBr	elder brother	RES	resultative
BEN	benefactive	GEN	genitive	SEQ	sequential
CAUS	causative	IRR	irrealis	TOP	topic
COM	comitative	NEG	negative	VEN	venitive
COMPL	completive	NMLZ	nominalizer	yBr	younger brother
CONT	continuous	PL	plural		

参考文献

- Enfield, N. J. 2021. *The languages of Mainland Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky (eds.), *Causatives and transitivity*, 87–120. Amsterdam: Benjamins.
- 風間伸次郎. 2012. 「特集ヴォイスとその周辺：まえがき」『語学研究所論集』17. 1–16. doi:10.15026/72782.
- Kurabe, Keita. 2016. A grammar of Jinghpaw, from Northern Burma. Ph.D. dissertation, Kyoto University.
- Kurabe, Keita. 2021. Typological profile of the Kachin languages. In Paul Sidwell & Mathias Jenny (eds.), *The languages and linguistics of mainland Southeast Asia: A comprehensive guide*, 403–432. Berlin, Boston: De Gruyter Mouton. doi:10.1515/9783110558142-020.
- Kurabe, Keita. 2024. Event cancellation in Jinghpaw. In Hideo Sawada (ed.), *Toward construction of a typological and genetic overview of minority languages in Burma*, 35–63. Fuchu: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies. doi:10.15026/0002001129.
- 倉部慶太. 2024. 「ジンポー語の受動表現資料」『語学研究所論集』29(22). 1–9. doi:10.15026/0002001044.
- Maran, La Raw and John M. Clifton. 1976. The causative mechanism in Jinghpaw. In Masayoshi Shibatani (ed.), *The grammar of causative constructions*, 443–458. New York: Academic Press.
- 岡野賢二. 2012. 「ビルマ語の「ヴォイス」：アンケートを中心に」『語学研究所論集』17. 170–183.
- Payne, Thomas E. 1997. *Describing morphosyntax: A guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 高垣敏博, 黒澤直俊 & 風間伸次郎. 2012. 「特集ヴォイスとその周辺：付録アンケート」『語学研究所論集』17. 17–22. doi:10.15026/72782.
- 徐悉艱. 1984. 「景頗語的使動範疇」『民族語文』1984.1. 35–42.

執筆者連絡先：kurabe@aa.tufs.ac.jp

原稿受理：2025年11月9日

刊行年月日：2026年3月31日